

藻場・干潟の維持と保全

有賀祐勝 (当基金理事長・東京水産大学名誉教授)

海は水産生物資源の育成・供給の場として大きな位置を占めている。外洋では主に微小な植物プランクトンが、また沿岸部では植物プランクトンに加えて大型藻類（海藻）や海草（アマモなどの顕花植物）が、それぞれ一次生産者として魚介類の生産を直接・間接に支えている。海藻や海草が形成する植物群落「藻場」は、魚介類に直接・間接に餌としての有機物を供給するだけでなく、産卵場、幼仔稚の育成場や生息場としても非常に重要である。さらに、藻場は海水中の栄養塩（窒素やリンなど）を吸収すると共に光合成の過程で二酸化炭素を吸収し酸素を供給することによって海水を浄化し、沿岸水域環境の維持・保全に大きく貢献している。また、干潟も魚介類に生息の場を提供すると共に水の浄化にも大きく貢献している。

しかし、こうした藻場や干潟を自然状態で保持した沿岸水域は、特に高度経済成長期を通して埋め立てや護岸工事などによって著しく減少し、陸域からの人間活動に伴う汚染負荷を受けて沿岸水域環境の悪化が進行してき

た。このような状況の下で、水産生物資源の育成・供給の場としての藻場・干潟の荒廃が大いに懸念され、その回復が重要な課題として取り上げられるようになった。また、特に近年では、気候温暖化の影響が直接・間接に及んでいると思われる“磯焼け”—大型の褐藻（アラメ、カジメ、コンブ、ホンダワラ類など）が構成する群落「海中林」が著しく衰退あるいは消滅する現象—が全国各地で報告されており、緊急な対策が望まれる。“磯焼け”は、水温・栄養塩など無機的環境の変化あるいは植食動物による摂食圧などの生物的影響のほか、人間活動の影響（過剰な収穫、海水汚染、透明度低下、その他）がその発生と持続の要因であると考えられる。

大型の褐藻が形成する海中林は生産力が高く、平均現存量が1～5kg(乾重)/m²あり、純生産量は1～2.5kgC/m²・年(≒3.7～9.2kgCO₂/m²・年)と見積られる。従って、これに相当する2.7～6.7kgO₂/m²・年の酸素が海中林から海水中に放出される。また、このような純生産量が達成されることは、海藻の平均的なC:N:P比(213:13.5:1)に基づけば63～160gN/m²・年の窒素と4.7～12gP/m²・年のリンが海中林によって吸収(海水中から除去)されることを示す。例えば1haの海中林があれば、この海中林によって1年間に海水中から37～92トンのCO₂と630～1,600kgの窒素と47～120kgのリンが除去され、27～67トンの酸素が海水中に添加されることを示している。このように、大型褐藻の群落は、陸上植物の群落の中でも非常に高い生産力を示す群落に匹敵するような高い生産力を持ち、沿岸水域の海水の浄化に大きな働きをしている重要な存在であるが、寿命が最大でも5～6年と短いため、そのままにしておけば、枯死後は分解されて二酸化炭素や窒素やリンが海水中に戻されることになる。すなわち、植食動物の



伊豆半島沿岸における褐藻カジメの海中林 (横濱康継氏提供)

理事長の交代がありました（平成22年5月）

前理事長 挨拶



奥富 清

本年5月、財団法人自然保護助成基金理事長を退任いたしました。

財団法人の設立時ならびにそれに続く17年余にも及ぶ理事長在任中は、基金関係者をはじめとして、多くの方々に直接間接に大変お世話になりました。ここに心から厚く御礼申し上げます。

この間、当基金は広く国内、海外の自然保護活動や研究に資金助成をしてきました。そのテーマは年代により徐々に推移してはおりますが、多くは緊急性の高い自然保護問題を取り扱ったもので、その助成規模も大型のものから小型のものまで、また助成先も研究者グループからNGOまで多様でした。

これらの助成は助成先の皆様の精力的な活躍により、一方では大きな自然破壊を伴ういくつもの開発計画の撤回、中止、あるいは縮小を余儀なくさせ、また他方では絶滅の危機にある種や個体群等の保全活動や研究を進展させるなど大きな成果を挙げることができ、本当にうれしく思っております。

理事長を退任するにあたって思うのは、いささか手前勝手かもしれませんが、当基金のこのような助成にかかわってきたことによって、その目的でもある地球環境と生物多様性の保全に個人としてもいくばくかは貢献できたのではないかとことです。もしそうであれば、これにまさる喜びはないと思っております。

後任の理事長には、有賀祐勝理事が就任いたしました。今まで同様、当基金へのご支援をよろしくお願いいたします。

新理事長 挨拶



有賀 祐勝

この度、奥富清理事長の退任に伴い5月開催の理事会で後任の理事長として選出され、就任いたしました。もとより浅学非力ではありますが、関係各位のご支援をいただきながら出来る限り努力し職務を遂行して参りたいと思います。

地球上における私どもの生活は、ある程度まで自然を犠牲にすることなしには成り立ちません。人間活動の発展に伴って自然破壊は進行し、特に近年では地球規模での温暖化の影響を直接間接に受けて困難な問題が多く発生しています。人類のより良い生存のためには、自然保護を更に強力に継続しなければなりません。当基金の目的である自然環境の保全を推進するための助成を一層強力なものとするため、関係各位のご支援ご協力をいただきつつ、目的達成のために努力したいと思います。どうぞ忌憚のないご意見とご指導をよろしく願います。

人事異動

財団創立以来、17年の長きにわたり理事として当財団の発展に多大な貢献をいただいた吉井 正氏（財団法人山階鳥類研究所顧問）は、平成22年5月をもって退任されました。

平成22年度 助成事業報告（見込み）

助成総額（予算）4,000万円

●共同助成事業

I. P.N.ファンド	（財）日本自然保護協会との公募助成	19件	1,972万円
		予算	2,000万円
II. ナショナル・トラスト	（社）日本ナショナル・トラスト協会との公募助成	5件	（未定）
		予算	1,000万円

●自主助成事業

III. 直接助成（当基金が緊急且つ重要と認める自然保護に資する各種助成）		2件	230万円
		予算	1,000万円

*上記Ⅰ～Ⅲの内容は下記

■助成内容（助成先・テーマ）

助成額

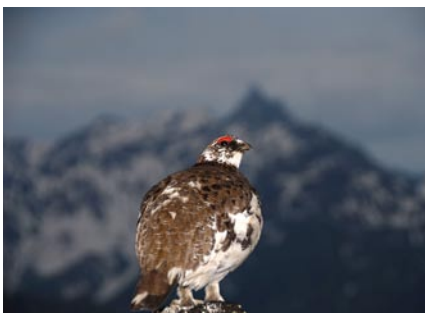
I P.N.ファンド第21期助成（明細次頁） 1,972万円

II ナショナル・トラスト活動助成

① NPO法人 ツシマヤマネコを守る会（ツシマヤマネコの生息密度が高い地区） ・対馬市上県町佐護西里瀬内の土地取得および維持管理費（継続・2年目）	（未定）
② NPO法人 阿蘇花野協会（阿蘇の草原） ・ナショナル・トラスト維持・管理費（継続・5年目）	50万円
③ 財団法人 阿蘇グリーンストック（阿蘇の草原） ・ナショナル・トラスト維持・管理費（継続・4年目）	40万円
④ 社団法人 生態系トラスト協会（ヤイロチョウの森） ・ナショナル・トラスト維持・管理費（継続・4年目）	50万円
⑤ NPO法人 霧多布湿原トラスト（霧多布湿原と水源の森） ・ナショナル・トラスト維持・管理費（継続・3年目）	50万円

III 緊急且つ重要な直接助成

① 南アルプス食害対策協議会（調査・研究） ・ニホンジカによる食害が深刻な南アルプス北部における被害実態調査と 高山植物等の緊急保護（継続）[長野県側]	150万円
② 南アルプス高山植物保護ボランティアネットワーク（活動） ・南アルプスにおける高山植物のニホンジカ食害対策（継続）[静岡県側]	80万円



塩見岳のライチョウ（中村浩志提供）



上高地梓川の流れと河畔植生
（上高地自然史研究会提供）



シカの生態調査の様子（泉山茂之提供）

プロ・ナトゥーラ・ファンド 第21期 助成先一覧

■国内研究助成 9件 小計1,077万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	助成額
1	絶滅危惧種シマフクロウの種保全をめざした 個体識別・遺伝的多様性の解析と遺伝子資源 保存システムの確立	北方鳥類多様性研究グループ	増田 隆一 (北海道大学大学院理学研究院自然史科学部門 准教授)	119	119
2	大村湾に生息するスナメリの保全に関する研究	大村湾スナメリ研究グループ	天野 雅男 (長崎大学 教授)	186	150
3	南アルプス高山生態系の保全を目的としたニ ホンジカの生態学的研究 (継続)	信州大学ニホンジカ研究チーム	泉山 茂之 (信州大学農学部 教授)	196	98
4	芦生冷温帯天然林における大規模シカ防除柵 設置5年後の生態系機能の回復過程とそのメ カニズムに関する研究 (継続)	芦生生物相保全プロジェクト (ABC project)	福島 慶太郎 (京都大学 特定研究員)	200	150
5	オガサワラオオコウモリの生息状況と海洋島 生態系での役割の解明	海洋島オオコウモリ生態研究会	杉田 典正 (立教大学大学院理学研究科 大学院生)	143	120
6	奄美大島固有の絶滅危惧種、アマミヒイラギ モチの繁殖と更新	奄美大島生態系研究会	指村 菜穂子 (埼玉県立自然の博物館 主事)	121	100
7	栃木県奥日光地域におけるニホンジカの高密 度化がネズミ類とその捕食者に与える影響	奥日光野生動物研究グループ	小金澤 正昭 (宇都宮大学農学部付属演習林 教授)	98	98
8	日本産絶滅危惧水生植物の現状、特に情報の 不足する種の実態解明	神戸大学水草グループ	角野 康郎 (神戸大学大学院理学研究科 教授)	93	93
9	利尻島の湿原の生態系保全と自然史教育のた めの環境史・植生史に関する研究	利尻・礼文自然史研究会	佐藤 雅彦 (利尻町立博物館 学芸員)	149	149

■国内活動助成 7件 小計586万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	助成額
1	伊豆諸島御蔵島・三宅島植生誌編纂	伊豆諸島植生研究グループ	八木 正徳 (東京都立新島高校 主任教諭)	54	54
2	普及・啓発・提言事業 生物多様性条約とラ ムサール条約によって保全する湿地の生物多 様性 (継続)	NPO法人ラムサール・ネット ワーク日本	浅野 正富 (NPO法人ラムサール・ネットワーク日本 事務局長)	174	174
3	調査研究に基づいたこんぶくろ池湿地の植生 管理指針策定と環境教育教材作成	NPO法人こんぶくろ池自然の 森	森 和成 (NPO法人こんぶくろ池自然の森理事・会長)	103	103
4	野生動物保護と自然の研修 (継続)	野生動物保護施設ネットワーク	森田 正治 (NPO法人道東動物・自然研究所/付属道東 野生動物保護センター センター長)	56	56
5	子供達とともに行う自然環境再生事業を通じ た低地林保全活動	子供達に身近な自然の大切さを 伝える会	大原 雅 (北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授)	80	80
6	北海道淡水魚保護フォーラム「川底からの河 川再生」	北海道淡水魚保護ネットワーク	帰山 雅秀 (北海道大学大学院水産科学研究院 教授)	49	49
7	北陸地方におけるウミガメの調査と保護活動	福井県立大学ふくいうみがめサ ークル	田畑 絵理 (福井県立大学 大学生)	79	70

■海外助成 3件 小計309万円

(万円)

No.	テーマ	申請者名	推薦者名	申請額	助成額
1	西南中国雲南省における絶滅危惧種水青樹 (<i>Tetracentron sinense</i>) 個体群の保全に関す る研究	唐 勤	富田 瑞樹 (東京情報大学 講師)	108	108
2	マレーシア熱帯多雨林地域の放棄されたゴム、 アカシア単一種植林地の復元生態学的研究	Baki Bakar	奥田 敏統 (広島大学大学院総合科学研究科 教授)	101	101
3	ブータンヒマラヤの亜熱帯常緑広葉樹林にお ける標高傾度に沿った遺存性植物種と生育地 の保全	Pema Wangda	北澤 哲弥 (千葉県生物多様性センター 研究員)	130	100

合計 19件 総額1,972万円

小笠原諸島における外来種対策

堀越和夫（NPO法人小笠原自然文化研究所 理事長）

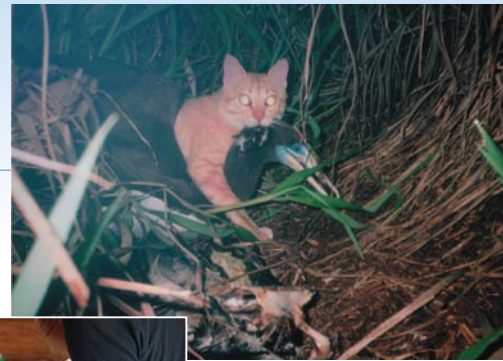
助成先：小笠原諸島自然環境保全機構
助成金額：2000万円（平成19～20年度）

海洋島である小笠原諸島には、大陸から隔絶された自然環境の中で進化した独自の生態系が形成されています。その科学的価値は世界的レベルとして認識され、日本政府により世界自然遺産候補地として登録申請が行われました。しかし、海洋島という限られた環境で進化した固有動植物は人為的に持ち込まれた外来種に対して競争力や抵抗力が弱く、すでに絶滅してしまったもの、絶滅の危機に瀕しているものが多いのが現状です。この貴重な自然を守るため、外来種対策は最優先事項として無人島のみならず、住民の住んでいる父島と母島においても始められています。しかし行政事業主体のためか、危機感や目指す将来展望を地域住民と共有し、具体的な対策に反映する場は限られていました。本助成事業により住民団体が独立資金を得ることで、地域住民の視点から外来種対策を考え、実行に移すことができました。

今回助成を受けた小笠原諸島自然環境保全機構は小笠原村に拠点をおく分野の異なった5つの民間団体で構成され、それぞれ独自に外来種対策に取り込みました。「NPO法人小笠原野生生物研究会」では、父島長崎地区に残る固有性の高い乾性低木林において外来樹種のモクマオウとリュウキュウマツの除去に取り組み、作業後には小笠原本来の樹林帯の景観を取り戻すことができました。「オガサワラシジミの会」では、一時は絶滅と考えられていた蝶の保護を目的として、外来捕食者排除と、餌植物であるオオバシママラサキの山域生息調査及び苗木生産を実施しました。「母島観光協会」では、アカギを生活材に活用する取り組みを行い、学校授業や観光事業に発展しています。「ボニンインタープリター協会」では、兄島ノヤギ駆除後の観察会を催し、外来種駆除によって取り戻せる植物群落の姿を初めて実感できる機会となりました。そして、「NPO法人小笠原自然文化研究所」での絶滅危惧種アカガシラカラスバトなど希少鳥類保護のための保全計画作成のワークショップ開催を始めとした活動があります。ここで、その活動の一部であるネコ対策をご紹介します。

海洋島の鳥類は警戒心が薄く、小笠原では6種もの陸鳥がすでに絶滅しており、ネコが一因であると考えら

ネコ対策開始となった野生鳥類のネコ捕食写真（母島南崎）



東京都獣医師会の派遣動物診療によるマイクロチップ挿入作業

れています。一部山域では、すでに2005年より行政と民間の連携でノネコ捕獲が始まっていました。捕獲したネコは東京都獣医師会に所属する都内動物病院に搬送して、馴化訓練後に新たな飼い主探しを行う取り組みです。しかし、週一便しかない船に乗せるまでネコを一時的に飼養する施設が確保できないことが全域規模まで捕獲を展開することの最後の障害となっていました。本助成によって山域ネコ飼養施設と捕獲専用車両が整い、目標であった父島全域排除が着手され、普及啓発にも大きな効果を生んでいます。

一方、集落のネコ対策としては、東京都獣医師会による派遣動物診療が実現しました。山域のノネコ捕獲を円滑に進める上で、飼いネコ識別用のマイクロチップを挿入し、望まれない仔猫の増加を防ぐ去勢不妊化手術を行うこと、貴重な自然の中でペットと住民と野生動物が共存していくため飼い主の責任と心構えについて、派遣獣医師を囲み地域住民が話し合う場を設けることが目的でした。過去2回実施した派遣診療により、飼いネコの不妊化処置はほぼ終了し、マイクロチップ挿入率は母島では10割、父島でも6割まで達しました。民間活動から始まった派遣動物診療は、助成終了後も住民の参画を得ながら小笠原村が引き継ぐことになりました。

2010年7月の世界自然遺産申請のIUCN視察時には、小笠原諸島の自然価値とともに、現地における民間団体の自然保護への取り組みも高く評価されました。世界自然遺産候補地区のこれからの保全と維持管理を進めるにあたって、住民自身が主体となって行政と対等に保全対策に取り組む基盤が、本助成によって形作られていたことが、その高評価をもたらしたと言えます。

シカによって改変される森林の生態系機能

——京都・芦生における大規模シカ柵実験から

福島慶太郎（京都大学フィールド科学教育研究センター 特定研究員）

助成先：芦生生物相保全プロジェクト
助成金額：350万円（平成20～22年度）

ニホンジカによる森林下層植生の食害問題は、年々拡大の傾向を見せており、各地で深刻な植生衰退を招いている。シカが森林林床のササや草本、木本稚樹を過度に摂食し、シカ不嗜好性種が残されて下層植生が単純化してしまう。このシカ食害による生物多様性の損失は、採食圧の高い状態が長く続くほど回復不可能に陥る危険性がある。下層植生は立派な森林生態系の構成要素であり、森林の公益的機能の発現に一躍買っているはずである。シカも本来なら生態系の構成要素の一つであるが、シカによる下層植生の衰退は、単に生物多様性の減少にとどまらず、土壌や渓流水などへの間接的な影響を通して、連鎖反動的に生態系機能全体へ影響を及ぼしている可能性があることを理解しておかなくてはならない。シカを含む森林生態系全体の適切な管理方法を検討するためにも、シカ食害の影響を生態系全体で把握することが必要不可欠である。

京都府南丹市に位置する京都大学フィールド科学教育研究センター・芦生研究林の針広混交天然林においても、シカ食害が深刻化している。芦生は、低標高域にコナラやウラジロガシなどの暖温帯性の木本植物が、標高が上がるとミズナラ、ブナなどの冷温帯性の木本植物が分布し、また日本海側の多雪地帯特有の種も見られる。下層植生も非常に多様性に富み、絶滅危惧種などの希少種も散見される。ところが2000年前後からハイイヌガヤ、ミヤコザサの群落やラン科植物など徐々に森林の下層植生がシカに食われ、現在ではオオバアサガラやバイケイソウ、コバノイシカグマなどのシカ不嗜好性種が下層植生の大部分を占めるに至ってしまった（写真1）。下層植生をシカの食害から守るため、2006年から様々なシカ排除柵を設置し、そのうちの1つに13haの集水域を丸ごと囲った大規模排除柵がある。このシカ柵集水域と、隣接する19haの対照集水域を比較しながら、下層植生の回復過程と、それに伴う生態系全体の変化を解明するためのプロジェクト、“芦生生物相保全プロジェクト Ashiu Biological Conservation (ABC) Project” がスタートした (<http://www.forestbiology.kais.kyoto-u.ac.jp/abc/>)。

本プロジェクトでは集水域という特徴を生かして、これま

での研究では扱えなかったスケールの大きな研究を行っている。様々な分野の研究者や学生が一堂に会し、下層植生の回復パターンの空間構造や植物の繁殖成功率への影響、また渓流水質や物質循環の変化、水生昆虫相・土壌動物相への影響など、生態系全体への波及効果の検証を行っている。柵設置から4年が経過した現在、下層植生はかなりの回復を見せ、定位置写真だけ見ても近年のシカによる採食圧がいかに高かったものかが分かる（写真2）。下層植生の回復に伴って渓流水質や水生昆虫相も少しずつ変化しており、生態系全体への影響を示唆する興味深いデータが次々と収集されつつある。

ABCプロジェクトでは今後も引き続き、シカの食害がこれら生態系要素の一つ一つに与える影響、そして生態系全体に与える影響を、長期モニタリングと短期集中調査を併用し、集水域スケールで明らかにしていく。あわせて、全国で行われているシカ排除柵の成功・失敗例に関する情報を収集・共有していき、より有用性の高いシカ防除柵の開発を進め、集水域全体で保全する意義とそのテクニックの普及を目指していけたらと思う。

芦生でのシカ柵研究は（財）日本自然保護協会・（財）自然保護助成基金によるPro Natura Fundのご支援、並びに京都大学芦生研究林のご協力をいただいで実施されています。ここに記して感謝申し上げます。



写真1 1998年(上)と2005年(下)の芦生の同一地点における林床の様子。出典：井上ら(2008), 森林研究77号, p.1-4.



写真2 芦生の大規模シカ柵内の様子。2006(左上), 2007(右上), 2008(左下), 2009(右下)年。出典：ABC projectのHP。撮影者：藤木大介氏

NPO法人ツシマヤマネコを守る会

所在地：長崎県対馬市上県町佐護西里瀬内 山林2.14 ha
助成金額：300万円



ツシマヤマネコ
(山村辰美氏撮影)

対馬上島の北端に近い佐護西里瀬内地区は、ツシマヤマネコの生育密度が高い地域です。ツシマヤマネコは、国指定の天然記念物であり、国内希少野生動植物種に指定されています。環境省のレッドリストでは、IA種に指定されています。ツシマヤマネコを守る会は、平成21年度のナショナル・トラスト活動助成を用いて、佐護の土地2.14 haを購入しました。この団体は、地元の人たちが中心になって組織された、ツシマヤマネコ生育地域保全のための活動を行ってきたNPO団体です。

ナショナル・トラスト地は、対馬西岸の小さな一流域で、南北方向約1 km、東西方向約600 mの谷の中にあります(写真1)。周辺の斜面には、スギ・ヒノキの植林と落葉・常緑樹林が広がり(写真2)、谷底の低地には、わずかな水流がみられます。かつては水田、畑などがありました

が、現在ではササに覆われ、近くに人家はありません。

ツシマヤマネコは、主に広葉樹の森に暮らし、沢を移動経路として暮らしています。ツシマヤマネコは、田んぼや畑にくらすネズミなどをエサとしているため、針葉樹の植林が進むとツシマヤマネコの生育環境は悪くなります。今回、購入されたトラスト地では、ツシマヤマネコの生育に適した場所になるよう現在、針葉樹の伐採が進められています。

このトラスト地の北側は、環境省の対馬野生生物保護センターがある棹崎公園となっています。このセンターは、環境省のツシマヤマネコ保全のための活動の拠点です。この公園と連続した土地がトラスト地となったことで、ツシマヤマネコの生育地の環境は以前よりも良好な状態になったといえます。



写真1 トラスト地のある谷の全景



写真2 周辺斜面の林の様子

自己紹介

有賀 祐勝



本年5月に理事長に選任されました有賀祐勝です。長野県伊那の山あいの農家に1934年に生まれ、高校まで過ごしました。高校時代と東京へ出てからの大学時代は高山植物の生態に興味をもち、木曾駒ヶ岳をはじめ幾つかの高山で山歩きを楽しみました。大学・大学院では主に湖沼・海洋の一次生産の調査研究を行ったので、それ以後大学における研究に終止符を打つまで高山からは遠ざかりました。研究分野は植物プランクトンの一次生産から海藻の一次生産と生理生態学的研究に範囲を拡大しましたが、1980・90年代にはユネスコ「人間と生物圏」(MAB)計画の世話を手伝い、ユネスコ本部でのMAB国際調整理事会にたびたび出席、東・東南アジア地域セミナーや東アジア生物圏保存地域の国際協力事業に数多く参画しました。ユネスコ活動や国際学会出席を機に自然保護地域を中心に世界各地の「自然とそこに暮らす人々の生活」に興味をもって接するようになりました。これからも自然と人々に接する国内外の旅をできるだけ楽しみたいと思っています。(あるが ゆうしょう)

★若い頃は山の植物に興味があったのにどういいうわけか、一転して海の植物学者になりました。海藻(海苔、昆布)等、皆様の身近なものに関わっております。食材についてのお問い合わせをお待ちしております。(岡本和子)

食物になるか収穫（刈取り）などによって除去しない限り真に海水を浄化したことにはならないから、藻場を構成する海藻の有効利用が望まれる。

海の生態系、特に沿岸生態系の中で重要な位置を占める藻場と干潟を健全な状態で維持・管理することにより、沿岸環境を良好な状態で安定的に維持していくことは、人類の生存基盤である地球環境を良好な状態に維持することにつながるのは勿論のこと、沿岸漁業の健全かつ持

続的な発展を図り、安全な水産物を安定的に供給していく上で最優先の重要課題である。そのためには、まず藻場及び干潟の実態を全国的に出来る限り正確に把握し、破壊されたあるいは衰退した藻場や干潟はその原因を明確にすることが必要となる。藻場・干潟環境の保全に関する学術的調査を推進し、その結果に基づいて荒廃した藻場・干潟の回復を図り、さらに積極的に有用な藻場・干潟の創生を目指すことが重要である。

平成21年度決算ならびに 平成22年度予算

当基金では平成22年3月12日に理事会・評議員会を開催し、平成22年度の事業計画、収支予算案が承認されました。また平成22年5月14日に開催された理事会・評議員会では平成21年度の事業報告、決算報告が承認されました。決算と予算は右表の通りです。

第16回 プロ・ナトゥーラ・ ファンド助成成果発表会

- 日 時：平成22年12月11日（土）
9:55～17:15（終了後懇親会）
 - 場 所：こどもの城 8F
(801～804研修室)
TEL 03-3797-5677
渋谷区神宮前5-53-1
 - 主 催：(財)自然保護助成基金
(財)日本自然保護協会
 - 参加費：無料（どなたでもお気軽にご参加下さい）
 - お申し込み：直接会場へお越し下さい。
途中参加も可能です。
- ※詳細はホームページ (<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>) をご参照下さい。

平成21年度決算ならびに平成22年度予算

(単位：円)

項 目	平成21年度		平成22年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	33,000,000	35,492,840	27,500,000
運用財産運用収入	100,000	62,251	50,000
雑収入	-	529,726	-
事業実施積立預金取崩収入	41,000,000	41,000,000	-
基本財産評価損積立預金取崩収入			30,000,000
収入合計	74,100,000	77,084,817	57,550,000
(支出の部)			
事業費	48,000,000	35,615,852	59,810,000
PNファンド公募助成	(20,000,000)	(19,850,000)	(20,000,000)
ナショナル・トラスト活動助成	(10,000,000)	(4,996,500)	(10,000,000)
緊急且重要な直接助成	(11,000,000)	(4,750,000)	(10,000,000)
事業管理費	(7,000,000)	(6,019,352)	(19,810,000)
一般管理費等	22,650,000	20,177,239	8,140,000
特定預金支出	400,000	400,000	400,000
予備費	300,000	0	300,000
支出合計	71,350,000	56,193,091	68,650,000
前期繰越収支差額	4,338,723	4,338,723	25,230,449
次期繰越収支差額	7,088,723	25,230,449	14,130,449

編 集 後 記

今年の夏のなんと暑くて長かったこと、人間も含めて動物達、植物達のぐったりした姿、熱中症の数も多く、朝起きると今日もまた晴れのため息のする毎日でした。やっと涼しくなったと思えば、こんどは相次ぐ台風、雨害、風害に見舞われた地方の方々には本当に気の毒でした。口蹄疫の為、殺された牛達も本当に可哀想でした。意味の無い殺人事件も多く、自然破壊とは直接関係なさそうな事柄もどこかで繋がっているのかもしれない。世の中いろいろやなことだらけですが、せめて自然だけは無事にゆたかであって欲しいものです。ともかく夏の熱気に負けないような熱意をもって自然保護に取り組みたいと思っておりますので皆様の御支援、ご協力をよろしくお願い致します。例年の決まり文句、来年こそは無事に穏やかな良い年になりますようにと申し上げて今年の締めくくりと致します。(岡本和子)

Pro Natura ニュース 第20号

発行者：財団法人 自然保護助成基金
発行日：平成22年11月25日

〒150-0046

東京都渋谷区松濤1-25-8

松涛アネックス 2階

TEL：03-5454-1789

FAX：03-5454-2838

E-mail：pro-natura@muj.biglobe.ne.jp

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>